

シニアの力

— 知恵と経験が社会を援ける たす

「P.19
事例 1
株式会社大津屋
代表取締役 小川明彦

「P.22
事例 2
富士特殊紙業株式会社
代表取締役社長 杉山真一郎

「P.24
事例 3
株式会社大石アンドアソシエイツ
代表取締役 大石聖

「P.26
インタビュー
一般社団法人定年後研究所
所長 池口武志

二〇二一年四月、七〇歳までの雇用が努力義務になった。人手不足が深刻さを増す一方、シニアの持つ経験と人間力を再評価している企業は多いのではないだろうか。シニアがいきいきと活躍している中堅中小企業取材し、アクティブシニアを上手に活用するヒントを探る。

取材・文 長野修

ながの・おさむ 1960年生まれ、新聞社、編集プロダクションを経て、96年よりフリーライター。2005年、小説『朱色の命』で「日本海文学賞」を受賞。

事例 1

株式会社大津屋

代表取締役 小川明彦



働くシニアの 真剣さと笑顔が 会社の力になる

福井県でローカルコンビニを展開する大津屋。大手コンビニにはない店内調理が人気を博し、地元の人々から愛されている。その施策に「役買っているのが同社の約二割を占めるシニアスタッフだ。彼らがどのように活躍しているのか、同社の取り組みに迫る。

福井県初のコンビニ「オレンジBOX」を開店

惣菜屋とコンビニがドッキングしたユニークな形態の店舗「オレンジBOX」と「オレポステーション」

を福井県で展開する株式会社大津屋。一般的なコンビニ商品が並ぶスペースは店舗の約半分くらいで、残り半分は多種多様な手作り惣菜とイートインコーナーが占めている。

いわば「ダイニング・コンビニ」とでも呼べる業態だ。従業員は約三五〇人。そのうち約二割が六〇歳以上のシニアで、同社の大事な主戦力となっている。

大津屋の歴史は古く、一五七三年に創業した酒造業がその前身。現社長の小川明彦氏が引き継いだ時点では、酒造業を廃業し業務用の酒屋に業務転換されていたが、新たなビジネスチャンスを探り開くべく、当時はまだ普及していなかったコンビニ

に挑戦することを決意した。

一九八一（昭和56）年に一店舗目となる「オレンジBOX」をオープン。初日は珍しさもあってか日商一〇〇万円を突破したが、日を追うごとに右肩下がりで、最終的には日商八万円まで落ち込んだ。あれこれ工夫を重ねたがどうにもならない。

小川社長は当時の苦境をこう振り返る。

「当時の福井には、コンビニはゼロ。一見スーパーのように見えるのに肉も魚もないことにお客様は違和感があり、夜遅くに買い物をする習慣もなく、コンビニという文化が全く理解されなかったのです」

「コンビニ文化を作るしかない」と考えた小川社長は、地元テレビのCMに打って出た。制作費は限られていたので、スライド形式で商品を